



トランプ次期政権の 性格と歴史的意義

金融アナリスト
永山卓矢

【日米マネタイゼーション政策の構築】

11月8日に米大統領選挙が行われ、翌9日の東京市場でトランプ候補の優勢が伝えられるにつれ急速に円高、株安が進んだ。ところが、同候補の勝利が確定すると、次期政権が打ち出す経済対策への期待やインフレ観測から、一転して米長期金利の急上昇とともに急激なドル高、株高が進んでいる。ドル・円相場は25日現在で、2週間超で実に12円70銭ほど上昇している。

トランプ次期大統領は当選が確定すると、すぐに100日で経済改革を断行する構えを見せた。そこで中核になるのが、連邦法人税を35%から15%に引き下げる事を柱とする5兆ドル規模の減税政策と、1兆ドルもの公共インフラ事業を打ち出す事だ。

しかし、米国は世界でも群を抜く債務国であり、連邦政府の債務残高も公表されているだけで20兆ドルに達している。そうしたところに財政出動政策を打ち出し、更に支持基盤の軍需産業に配慮して国防費も大幅に増額していけば、かなりの規模で財政収支と経常収支の「双子の赤字」が膨れ上がるのが避けられない。

歴史上、覇権国はその地位を維持していくにあたり、中核となる属国が常に存在した。かつての覇権国である英国の場合、インドと南アフリカがそれに該当した。現代の米国の場合、それは世界でも圧倒的な原油輸出大国であるサウジアラビアと、群を抜く債権国である日本である。

覇権国は「世界の一大需要基地」としての役割を担い世界経済成長を牽引していく責務を負う以上、経常収支が赤字基調にならざるを得ない。それをファイナンスするにあたり、日本のような大幅な貯蓄超過国から資金を流入させる必要が生じるからだ。

特にこれからトランプ次期政権が「双子の赤字」を積み上げ「グレート（偉大な）・アメリカ」の復活を提唱している以上、ファイナンスの問題が通常の歴代政権よりも遥かに重要に。実際、これまで「双子の赤字」を膨張させた政権として80年代のレーガン、00年代のブッシュ両政権があるが、いずれも中曽根首相、小泉首相と個人的に良好な関係を構築した。トランプ次期大統領が大統領に就任する以前に、自宅（トランプタワー）に外国首脳として初めて安倍首相を招いたのも、至極当然といえる。

そうして世界覇権国である米国は、財政出動政策を実施する事で世界経済成長を牽引、それに伴い増発される米国債を日本側が引き受ける事で、強力な「日米マネタイゼーション政策」が推進されていくのだろう。そうした政策が軌道に乗っていくと、世界経済はやっとデフレ圧力から脱する事が出来るのではないのか。

そのためにも、トランプ次期政権が実際に「双子の赤字」を積み上げるのを前に、日銀に外債購入の導入を決めさせておかねばならない。そのためには、一時的に信用不安が強まり、円高や株安がもたらされる必要がある。

最近の急激なドル高や株高はあくまでも期待先行によるものであり、それが出尽くすと一旦調整局面に転じておかしくない。そこに中国不安や欧州の銀行不安が再燃して、一時的に信用不安が強まる事は十分考えられるだろう。

実際、中国を筆頭に多くの新興国は巨額なドル建て債務を抱えている。米長期金利が上昇すれば資金流出に拍車がかかってしまい、またドル高が進めば対外債務の返済負担が増していく事になるため、信用不安が強まっておかしくない。

また欧州でも多くの銀行が脆弱な資産内容を抱えているが、特にイタリアの銀行は総融資の17%が不良債権化している程劣悪状態にある。12月4日の国民投票の結果次第では、反EU勢力が一段と躍進して他の欧州諸国にも波及していく恐れが出てくる。信用不安が再燃する要因には事欠かないのが現状である。

【経済成長システムの変質と自由貿易の後退】

ところで、トランプ次期大統領が打ち出した政策姿勢で、経済対策と並んで注目されているのが、22日に大統領に就任したその日に環太平洋経済連携協定(TPP)からの離脱を通告すると明言した事だ。「アメリカ・ファースト」の理念に基づき、2国間の交渉で自国に有利な条件を引き出す意向を表明している。さらに、次期大統領はかねがね、中国製品に対して一律45%の関税をかけることも提唱している。多国間での貿易自由化の枠組みが放棄されつつあるのは、これまでの経済成長システムが根本的に変質していく事を示唆するものだ。

冷戦が終わり90年代に入ると、米国経済は産業競争力で日本に敗れた中で、情報技術(IT)産業を興隆させてグローバル生産体制と金融主導型の経済構造を構築してきた。中国沿海部に生産工場を設立し安価な労働力を活用する一方で、付加価値の高い職種は米本国で賄い、更に本社の管理部門をIT産業で結び付け、安価な製品の供給体制を築いてきた。他方、需要面では、米国内で金融業を発展させる事で資産価格を高騰させ、それによる資産効果から家計には所得以上の消費社会を謳歌させてきた。

ところが、もとより国内産業が空洞化していた中で、低付加価値労働が新興国に移転したため、米国内では中低所得者層が没落しつつあった。しかもIT産業の発展によりホワイトカラーの仕事も失われてしまった。それを資産価格が高騰する事で覆い隠してきたが、08年9月から09年前半にかけて、リーマン・ショックによる巨大な金融危機に見舞われたために剥落し、資産や所得の格差の拡大による中間層の没落が表面化してしまった。しかも、中国沿海部でも人件費が目立って高騰してきた事で、グローバル生産体制も立ち行かなくなってしまった。

米権力者層の意向を受けてその地位に就任するトランプ次期大統領が、やがて軍需の創出をも含む財政出動重視の路線を打ち出している背景には、そうした事情がある事を押さえる必要がある。

【米国の世界覇権は衰退期に】

もう一つ指摘すべきなのは、トランプ次期大統領が打ち出している反自由貿易的な姿勢も、歴史的な潮流で説明できる事だ。

1930年代から40年代初頭にかけての大恐慌とリーマン・ショックによる金融危機は、共にコンドラチェフ・サイクルの大底付近で起こった。ただ、リーマン危機が大恐慌ほど深刻な状況にならなかったのは、同サイクルより上位のサイクルであり、世界覇権国の盛衰を表すヘゲモニー・サイクルの位相と関係しているからである。

すなわち、大恐慌の際には世界覇権が英国から米国に移る過渡期にあり、覇権国が存在しない状態であった。ヘゲモニー・サイクルの大底付近とコンドラチェフ・サイクルのそれとが重なった事で、極めて破壊的な状況に陥ったといえる。これに対し、リーマン危機の際にはコンドラチェフ・サイクルの大底期を迎えていても、ヘゲモニー・サイクルの天井期で米国の覇権の絶頂期であった事が、それほど深刻な状況にならなかったといえる。

ただし、リーマン危機を過ぎた事でコンドラチェフ・サイクルは上昇期に転じたものの、ヘゲモニー・サイクルは下降局面に転じて米国の世界覇権が衰退期に向かい出している。トランプ次期大統領が反自由貿易的な姿勢を見せているのは、こうした事が関係していると考えられる。おそらく、足元で上向きだしたコンドラチェフ・サイクルが天井を打って下降局面に転じ、ヘゲモニー・サイクルの下降局面の後半期にさしかかると、世界の通商関係はブロック経済化に向かうのだろう。

永山卓矢の「マスコミが触れない国際金融経済情勢の真実」

詳しくはこちらへ → <http://17894176.blog.fc2.com/>

ザ・テクニカル 中期サイクルも未だ初期

日経平均株価はトランプショック後の安値 16,111 から先週末は 18,483 に到達。11 営業日で約 2300 円幅以上の上昇。

暴走列車も短期では行き過ぎの領域に入っている。先週は 2014 年 10 月末日銀の異次元緩和第二段の時の例を挙げたが、次の通りコメント「日経平均は直前の安値 14,529 (14 年 10 月 17 日) から 11 営業日で 2,600 円近く上昇した (11 月 4 日 17,127)。今回の上昇幅とスピードも当時に匹敵するものがある。仮に今回も 2,600 円幅を上げるとすれば、18,700 円レベルとなる。当時はその後、4 営業日の僅かな調整を入れて再び反騰、1 か月後に 18,000 円に達した。安値 (当時の 1 年サイクルボトム) から 8 週間ではぼ 3,500 円幅を上げたことになる。このロケットスタートが今回の起点 (11 月 9 日) から始まっているとすれば、その 8 週間後、即ち来年 1 月第 1 週には 19,600 円程度にはなっているだろう。また当時 (14 年末) の上昇率 (24%) で見れば、今回、約 2 万円となる」。

中期的なトレンドは上昇局面にあるものの、短期では数日の調整を想定する。上記の 4 営業日程度。

今週の押し 週足で節目の場面に

先週の当欄ではこう記述“そろそろユーロ売りの買戻しが入ると予想され、いよいよ乾坤一擲新規買い勝負である。と、一般投資家にとって買い注文が出しやすい週になるのではないかと筆者は予測する。…しかし経験則上、相場は得てして注文が出しやすい相場方向の逆を行くパターンになる事が少くない。故に今週は買いではなく売り、理想としては戻り売りを推奨する。…昨年 3 月からの相場は 38 週、29 週で安値が出現している事を鑑みて、節目となる安値は本年末から来年始めに出現すると見る。…相場は少なくとも 1.045、もしくはパリティ (1:1) になると予測。買い参入はそこまで待ちたい。なお、売りの損切りはリスク許容度に応じて 1.0950 か 1.115 以上の引け値に置きたい”。実際、21 ~ 22 日にかけ反発するも戻りは僅かで、24 日には 1.0518 まで下落して年初来安値を更新。

ここで野線的には節目に差し掛かった。それは昨年 3 月、12 月両安値とのトリプルボトムの可能性である。底打ちでなければ

サイクルベースでは中期 13 ~ 19 週のプライマリーサイクルがトランプショックの 11 月 9 日から始まったとすれば、まだまだ天井を付ける時間帯ではない (今週は 3 週目)。

少なくとも 5 週 (12 月 14 日) 以上、強気型サイクルの出現を期待するなら 8 週以上の上昇がメリマンサイクル理論から導き出される。それは新年第 1 週になり、先週の本欄の目標「年末年始 2 万円」から割り出した時間軸と合致する。

短期的な見通しについては 2 週間前のコメント「目先は 20 週サイクルの上昇期は 10 週以上続くと想定される (強気型サイクル)。そのターゲットは 18,720 ± 308、さらに、20,332 ± 498。このシナリオは (11 月) 9 日の安値が更新されるまで有効」。

既に第 1 ターゲットに達成した。次の第 2 ターゲットを視野に今後予定される押し目ではまた買いを仕込んでいくのが良いだろう。ただこの押し目が 17,700 を割って引けてくるとかなりの深押しを警戒する必要がある。

今回の上昇過程、11 月 15 ~ 16 日にかけて空けたギャップ 17727 ~ 17764 は重要なサポートになる。これは本年 1 月末、日銀の緩和発表後の続伸、翌週月曜日に付けた動き 17,666 からその日の高値 17,905 をカバーしている。

ばレクタングルと呼ばれる上下平板な保合いの可能性もある。

感謝祭からクリスマスまでは、成績の良かった市場関係者から休むので商いが閑散になりやすい。その場合、少なくとも 23 日移動平均 (先週末で 1.0833) 付近まで戻る可能性はある。短期売りに徹するなら目先の突っ込み場面は買ってもよいだろう。

ただ、買いはあくまで短期である。ホリデーシーズン中は成績の悪かった市場関係者が残される。近年、この時期は市中に急ぎ働きの横行、値が荒くなる。相場の世界には長谷川平蔵はおらず、自分の身は自分で守るしかない。年明けまで様子見か、淡々と売るか。現行サポートは崩れると大下げの可能性が有る。



アストロカレンダー

永井 元

誰も予想しない結果が出たというが、過半数以上が期待した結果となっただけだった。予想が外れたとか、とやかく言うのではなく、この状況に対応しなければいけないだけのことだ。

安倍総理が早速訪米したが、これは良いことと言える。

日本側からトランプ氏の人脈を辿って会談にこぎつけたと言われている。だが、逆かもしれない。巧みに操られていただけで、トランプ側が仕掛けたのかもしれない。

真相は闇の中。政治はわからない。

変わることは、いったい何かはまだ未知数。これまでのアメリカではなくそうなることだけは事実と囁かれている。

しかし、本来のアメリカを取り戻す可能性もある。ひと昔前、ケネディ大統領が言った有名な一言がある。「国が何をしてくれるのかではなく、祖国に何ができるか、問うてほしい」と。

実業家トランプ氏が政治の手腕に長けているかはわからないが、実業界での手腕はある。実業界も結果がすべて。批判めいた噂も多々あるが、大富豪となっているのは事実。インチキではこまですこれなかったはず。まずは見守ることが肝心か。

さて、冬至図は株式市場の突っ込みを暗示。向こう 3 カ月には何かある。また、ブラックマンデーから間もなく 30 年目。

半年オープンからすると、5 月頃から要注意期間だ。

アストロカレンダー 12月 永井 元

	天文現象	注目マーケット		天文現象	注目マーケット
1 木			16 金		
2 金	月赤緯最南 火星・木星120度	穀物・株式	17 土		
3 土	火星・土星60度		18 日		
4 日			19 月	水星逆行開始	全マーケット
5 月			20 火		
6 火			21 水	下弦 冬至 月赤道通過	全マーケット
7 水	上弦 水星・火星45度	コーヒー	22 木		
8 木			23 金		
9 金	月赤道通過	為替・小豆・ゴム	24 土		
10 土			25 日	月最遠	
11 日	水星東方最大離角	株式	26 月	金星・土星60度	小豆
12 月			27 火	木星・天王星180度	株式
13 火	月最近		28 水		
14 水	満月	全マーケット	29 木	新月 水星内合 水星・火星60度	全マーケット
15 木	月赤緯最北	穀物	30 金	天王星逆行終了	海外マーケット
			31 土		

今週の相場風林語録

ウラルの山は高けれども、時来たれば崩れることあり

相場には絶対というものはありません。ウラルの山だって崩れる時が来れば崩れる。その時に遭遇するか、しないだけである。

今週の**九星★波動**

南雲 紫蘭

ありえない世界

止まらない円安と株高。相場はこのままユーフォリア（多幸感）をもって年末を迎えるのでしょうか。

九星波動から見れば、そう簡単には言えないようです。

年盤《二黒土星》の月盤《二黒土星》という強烈な月は「ありえない上にもありえないことが起こる」。

後解釈すれば、ありえないトランプ大統領候補の勝利で、これまたありえないはずの株高、円安が起こった、ということなのです。

それは非常に象徴的であるとともに、長い目で見ればとても注意しなければならない色々なことがあります。

例えば、大統領選挙直後の相場と1年後の相場を観察してみると概ね「真逆」となることが多いのです。

オバマ大統領当選の直後は株は大きく下げましたが、翌年は強烈なラリー（反騰）でした。

相場指南道場

トレーダーあすなろ物語 (372)

中原 駿

東京の秋は深まっていた。

シンガポールは常夏の国なので、季節感は殆ど無い。

香港も僅かな季節があるが、大差はない。

それでも香港はセーターを着る季節があるだけマシだったが、とにかくシンガポールは12月にわずかに涼しくなる以外は、全く季節性が無い、といっても良かった。

強いて言えば、1月からの強烈なマレーシアの焼畑農業の成果でもある噴煙で臭くなることと、4月前後にありえないほどの暑さで、シンガポール在住者ですら、声も出なくなる時期がある、というくらいだった。

紅葉に心を動かされる自分がいた。

第六感の ゆっくり走ろう



テクニカルアナリスト 葛城 北斗

3～5円幅の押し目も視野に入れて

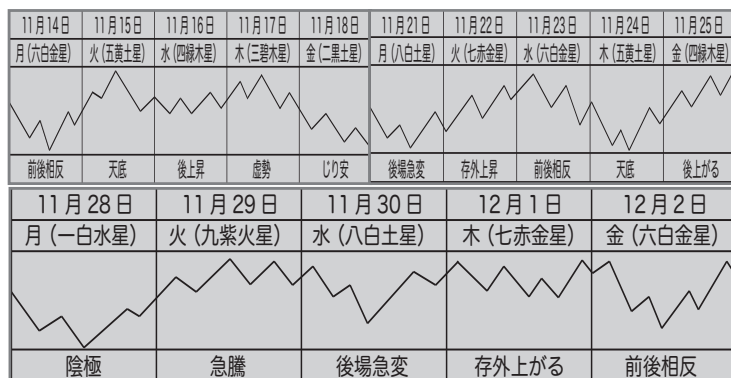
ドル円相場は先週末の東京市場では113円90台をつけた。先週は「どうにも止まらない」リンダ相場と申し上げたが、週明け月曜日以降110円台ローの安値を最後に金曜日まで7連騰。“今日の高値は明日の安値”状態が続いている。先週は長期サイクルがボトムを付けたからにアホになって買っていく相場と申し上げたが、それはそれで良い。ただ、目先は暴走気味。どこかで3～5円程度の急落が何時入ってもおかしくない状態と化している。無論それまでに、あと数円上げる可能性は否定できない。ここまできれば、ロングを一部利食いしても半分以上は残しながら、押し目が来るまで辛抱強く待つことも必要かも。

ただ、トランプショック以降、押し目が入っても1円程度で1日以内に終わっている。これでは押し目を待っていても買えない。これが次に深い押しが入るとともすれば危険に晒される。押し目買いも深くなると、資金が足りずに投げが出てくる。1～3円程度なら未だましたが、5円幅になるとかなり厳しい。前5年サイクルの上昇期でもこの深押しは頻繁に出現した。2012年9月末から上昇に転じた相場は自民党に政権を変えてからは今回と同様、ドル円の急騰劇が始まった。特に12月以降、82円台の相場が翌年2月95円近くまで上伸、そして2月25日には94.72から90.89まで4円近く、4%を半日で下げた。その後乱高下しながらも上昇を継続、13年5

ただトランプ勝利後の相場急騰は、1年後は危険な状況になっている事もあるいは想定しておくべきかもしれません。

九星波動は月盤《二黒土星》も終盤。月盤は基本逆転していただきますから、来月の月盤《一白水星》は要注意。いったん天井形成で急落の恐れありと見ます。

恐らく今週末2日の雇用統計がポイントになると思われます。



東京にいた時には、紅葉の有り難さがまるで感じられなかったのに。

不覚にも、上野は深く感動するようになっていた。

あるいは、あまりに苦しい自分の立場が、まるで晩秋のような切なさや重ねなっているのかもしれない。

上野はあれから一睡も出来無かった。

そのため、端から見るとまるで幽霊が銀杏並木をうろついているかのように見えたのではないかな。

上野は、手入れのしっかりした鏡面のような革靴を履いていた。

その靴に、黄色い葉がわずかに写っている。

銀杏の葉はその鏡面に舞い、足元に落ちる。

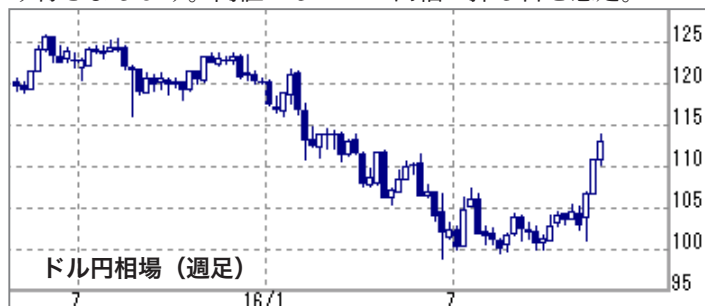
そして、上野の靴に踏まれ、シャキシャキとした音を立てていた。

その哀れさは、これからの上野を象徴しているようだった。

月103.73をつけるに至った。しかしその後17営業日下げて93円台。一気に10円幅、下げ率は9.6%。この過程では1～2円下げては押し目買い、3円下げてはここも押し目買いと入れ込んだ投資家は5円下げたところでほぼ全滅。

高値から10円下げたところでは誰も買いの手がなく、投資家は戻り売りに展じ、そこからまた踏み上げ相場で2番天井をつけに行った。つまり、長期サイクルの上昇期であっても、その最初の上昇が取れたとしても、次の押し目買いで全ての利益を吐き出し、さらに損失を被るところが、相場はそう簡単なものではないということを教えてくれる。

結局、相場のトレンドが正解であっても、欲深さが命取りになることがある。まして効率を重視して、目先のアヤを短期売買で稼ごうとしても、逆に損を拡大することになる。欲を抑え、押し目が入っても最大10円幅の下落してもパニックしないように資金管理怠らないことが重要。10万ドルで20円幅に抜ければ200万、それを50万、100万、500万ドルで狙うから、ちょっとした押し目で即、退場となる。先は未だ長い。ゆっくり行きましょう。高値から3～5円幅の押し目を想定。



サイクルだけ話します。

— メリマン・サイクル理論 備忘録 —

【第17回】NY原油のサイクルについて(4)

さて、NY原油のサイクル解析も今回でひとまず終了。最後は週足を分析。ここまでの分析では、日柄の歪みによる長期サイクルの短縮や延長で、幾つかのサイクル候補が出ていました。

毎月発行しているMMAサイクルズレポートで原油の週足は、通常15～23週ごとに節目となる安値が来ると、これがプライマリーサイクル(PC)と定義されています。実際2010年5月安値から2014年5月安値までの4年間、このレンジを逸脱した相場になったのは一回しかありません。

しかしここから2015年3月の安値までの46週間のうち、14年6月高値から39週間下落。これ以降の日柄が若干長めになっている感否めません。15年3月安値から同年8月安値までは23週ですが、そこから16年2月安値までは24週。そしてそこから8月安値までは25週。つまり延長PCが連続して続いている事になります。

更にPCのサブサイクルは、2月安値以降、3つのメジャーサイクル(MC:レンジは通常5～8週)で構成されています。実際、一度10週に延長しましたが、他はこのレンジで進行しています。相場は前週14日に45日移動平均と9月20日の安値を割り込んだ後に反騰。先週15日、25日移動平均を上抜けたので第2MCボトム形成が確認出来ました。よって現在は第3MCの天井形成場面。強気なら52～54ドルを目指します。

MCが天井をつけると、そこからは現行PCのボトム形成場面が始まります。この時、8月3日の安値が維持されれば良いのですが、割り込むと年末から来年1月頭まで安いでしょう。



メリマン通信 — 金融アストロロジーへの誘い —

T字スクエアの影響と新月と射手座と

ドル/円、ユーロ円、日経平均株価、そして米国株価。これらは軒並み11月25日に週の高値を形成した。一方NY金はこの日に週の安値を形成。ユーロドルは24日に安値をつけた。更にNY原油は25日に急落している。これらは全て、先週の当欄で掲載したホロスコープの天体位相の影響を受けていると筆者は考えている。木星は金融、特に株式との関連性が高い惑星である一方で、原油の支配星という側面がある。そのため、木星と金星、冥王星、天王星とT字スクエアの関係になる先週末は反転ポイントになりやすい時間であったと考える。

先週掲載のホロスコープは日本時間11月26日午前0時のものの、オーブ(±3営業日)を考慮すると、この天体位相の影響は今月末30日まで続く可能性がある。この日柄的なリスクをとりつつ、週初は短期逆張り戦略をとるのも悪くないと思う。

今週の主な予定・経済統計

11月28日(月)

- ・ドラギECB総裁、議会証言
- ・OECD世界経済見通し公表
- ・OPEC、非OPECが事前会合

11月29日(火)

- ・10月の日本雇用統計
- ・第3四半期の米GDP改定値
- ・9月の米S&Pケースシャー住宅価格(前年比5.20%の予想、前回は5.13%)
- ・パウエルFRB理事、ダドリーNY連銀総裁、講演

11月30日(水)

- ・米地区連銀経済報告(ページブック)
- ・臨時国会会期末
- ・10月の米中古住宅販売件数制約指数
- ・10月の米個人所得支出
- ・10月の米コンファレンスボード消費者信頼感指数
- ・ドラギECB総裁、講演
- ・OPEC総会
- ・米週間原油在庫
- ・パウエルFRB理事、メスター・クリーブランド連銀総裁、各地で講演
- ・11月の米ADP雇用統計(前月比16万人増の予想、前月は14.7万人増)
- ・11月の米シカゴ購買部協会景気指数(52.5の予想、前月は50.6)

12月1日(木)…下弦

- ・米週間新規失業保険申請件数(前週は25.1万件)

12月2日(金)

- ・11月の米ISM製造業景況指数(52.2の予想、前月は51.9)
- ・10月の米建設支出(前月比0.6%増の予想、前月は0.4%減)
- ・11月の米非農業部門雇用者数(NFP)(前月比17.5万人増の予想、前月は16.1万人増加)
- ・11月の米失業率(4.9%の予想、前月は4.9%)

このT字スクエアの影響を除くと、今週相場の節目を付けそうな時間帯は11月29日の新月と、同日から12月1日まで出現するジオ射手座ファクター(射手座サインへの月入居)くらいしかない、というのが筆者の印象。ここは金やユーロの戻りの限界場面になるのではないかな。

次の大きな反転ポイントに関しては、先週既に指摘。即ち“…12月26日前後が怪しい。12月27日(米国時間12月26日)3時半ごろ、木星と天王星はオポジション(180度)の関係になる。その2日前の25日に土星と天王星、金星と木星はそれぞれトライン(120度)の関係に。トラインは惑星間が良好な関係である事を示すソフトアスペクトと呼ばれる天体位相。良好転じて上昇のピーク、即ち天井と関連性が高い。これは株式や米ドルにはポジティブ、金やユーロドルにはネガティブに働くものとする。更にこの時間帯は12月19日～2017年1月8日まで発生する水星逆行の中間点(12月28～29日)。筆者はこのエリアで大きな相場の節目が出現するものと予測する”。

WEBサイトより一足早く、1週間分まとめ読み!!

今週のアストロロジーinfo

11月28日(月) 為替週間ギャップ発生か

11月29日(火) 一方向への動き加速

11月30日(水) 前日の流れ引き継ぐ

12月01日(木) ドル円陰線月

12月02日(金) NY市場、為替動き加速

12月03日(土) 先読みの先読みは元に戻る

12月04日(日) 大勝利後、間をおかず次の挑戦は失敗する

12月26日発売予定

星を読む。サイクルを読む。市場を読む。
Feel the star. Feel the cycle. Feel the market.

フォーキャスト2017

アストロロジーとサイクルで
2017年の相場を読み解く究極の書

レイモンド・メリマン 著 秋山日輝香・投資日報編集部 訳
投資日報出版発行 8100円(税込・送料別)

簡単・便利な『投資日報オンラインショッピング』もご利用ください。

お問い合わせ: 投資日報出版(株) <http://www.toushinippou.co.jp/>
お申込みは: 投資日報出版(株) <http://www.toushinippou.co.jp/>
〒103-0013 東京都中央区日本橋人形町3-12-11 GRANDE 人形町6F 電話: 03-3669-0278 FAX: 03-3668-4444